

目次

はじめに I

ユダヤ人と資本主義に関する考察 I

第一章 高利貸しの長い影 15

近代ヨーロッパの思想における資本主義とユダヤ人

第二章 資本主義に対するユダヤ人の反応 73

ミルトン・フリードマンのパラドックスを再考する

資本主義への過渡期におけるユダヤ人の人口動態 78

近代以前の経験と文化的傾向 83

ユダヤ人の経済的成功 94

政治的、イデオロギー的反応 103

相対的な観点からみたアメリカ人の経験 126

		第三章 過激な反資本主義	133
		共産党員としてのユダヤ人	133
		ソビエトでの厳しい試練	138
		失敗に終わったドイツの革命	144
		ハンガリー	152
		ボリシェヴィキとしてのユダヤ人の神話	157
		西ヨーロッパおよび東ヨーロッパ	162
		第二次世界大戦後	165
		第二次世界大戦後のハンガリー	172
		ソ連圏の他の場所	182
		第四章 二〇世紀のヨーロッパにおけるナシヨナリズムの経済学とユダヤ人の運命	187
		謝辞	217
	参考文献		20
	索引		1

はじめに

ユダヤ人と資本主義に関する考察

資本主義は、近代社会におけるユダヤ人の運命を決める最も重要な力となってきた。もちろん、資本主義は現代社会のすべての人の運命を決める最も重要な力であるという、いかにももつともな主張もある。とはいえユダヤ人は資本主義にうまく適応し、資本主義との間に特別な関係を築いてきた。もちろんすべてのユダヤ人がそうであったということではない。けれども、法的に平等な立場で競い合うことを許された場合、ユダヤ人は他とは比べ物にならないほどの成功をおさめることが多かった。それは祝福であると同時に呪いでもあった。

資本主義の歴史において、ユダヤ人は象徴としても現実のものとしても異彩を放つ存在だった。それでもユダヤ人と資本主義の関係そのものは、その重要なメリットほど注目されてこなかった。⁽¹⁾この関係が比較的無視されてきた理由の一つが、近代の学術研究の特徴となっている分業にあることは間違いない。歴史学者は特定の国や地域の歴史に注目しが

ちだが、ユダヤ人は国や地域的な境界を越えて世界中に散らばっている。そのうえユダヤ人と資本主義との出会いには、学問の境界という点でも混乱がある。それは経済的な歴史であるだけでなく社会的、政治的、文化的な歴史であり、ビジネスの歴史であると同時に家族と民族国家訳注1の歴史でもある。しかし、このテーマがあまり重視されなかった理由は他にもある。ユダヤ人と資本主義に関する議論は、いろいろと神経に障る問題に触れることになるからである。

ユダヤ人の経済的成功は、ユダヤ人にとって長い期間にわたって誇りと困惑の源だった。反ユダヤ主義者が何世紀にもわたって、資本主義はユダヤ人による支配と搾取の一形態であると非難し、ユダヤ人の成功は彼ら自身の好ましからざる性質のせいだとしてきたのは、ユダヤ人が経済的に成功していたからである。こうした議論の背景にある反ユダヤ的な感情のため、ユダヤ人は心の中で独り言を言うとき以外は、自分たちが経済的に成果をあげているという現実を重要視しないようになった。さらに、先進資本主義経済の仕組みは、ほとんどの人たちにとって不透明で理解しにくいものである。経済状況が悪くてつらい目に遭ってい

1 「訳注」民族国家 (nation-state) …日本では「国民国家」と訳されることもあるが、多民族国家が多い海外では、民族の意味で使われることが多い。

る時に、自分たちの不運の責任を押し付けられるためにわかりやすい具体的な標的を探そうとする者がでてくるのは避けられない。ユダヤ人はしばしばその標的となった。現在でさえ、ユダヤ人の中には、ユダヤ人と資本主義について公に議論するのは、本質的に愚かなことなのだと考える者がいる。まるで注意深く沈黙を守っていれば、ユダヤ人とお金に関する陰謀めいた幻想を打ち消せると思っているかのようだ。

経済学者や経済歴史学者にとって、近代以前の文化的概念と文化的性質が、近代の資本主義の形成にどの程度関わっていたのかという問題は、せいぜい困惑の種にしかならない。計量経済学という鎧をまとった、現代の経済歴史学者が考えたがるような分野でもない。経済学者はこの数十年間に、経済的成功に役立つ特性という意味で「人的資本」という概念を使うようになってきた。ただ、彼らは教育期間のような測定できる基準をもとに考えたがる。人的資源の中に、性格特性や正規の教育では教えてもらえないさまざまなノウハウまで含まれようとすると、方法的にも捉えどころがなくなってしまう。実際の経済史や、ユダヤ人が実際にどのような役割を果たしていたのかは、「数えられないものは重要なことではない」という暗黙の前提に基づいて仕事を進めるような人には、ほとんど理解できないのである。

自由主義者にとって、法的に平等な条件のもとで特異な集団が成果を上げるといふ現実には、

ある種のスキャンダルであると同時に、平等主義に基づく前提を侮辱するものである。なぜならそれは、「機会均等」というスローガンに疑惑の影を落とすことになるからだ。チャンスを生かす能力が、家族や文化的共同体のような、個人的な領域から受け継がれた文化特性に大きく影響されることがわかれば、結果の不等等を法的差別だけのせいにすることはできないし、学校のような正式な公的機関によって不等等をなくすることもできなくなる。

ユダヤ人は資本主義においてあまりにも優れていたために、近代ナシヨナリズムによって破滅的な結末を迎えることになった。その事実そのものが、ナシヨナリストにとっては困惑の種であった。一九世紀後半から二〇世紀にかけての多くのナシヨナリズム運動は、ユダヤ人が非ユダヤ人の同国人より資本主義的活動に優れているという（部分的な根拠しかない）認識のために、ユダヤ人の市民権と法的平等を制限しようとした。革命前のロシアやポーランド、ハンガリー、ドイツといった国々の多くのナシヨナリストにとって、「真の」国民は、主にユダヤ人に対抗して定義されたものだった。経済活動はゼロ・サム・ゲームであり、誰かが利益を得るときには他者が犠牲になると考えられていた時代には、ユダヤ人の利益のために「本当の」国民が精神的、肉体的苦痛をこうむっていると考えられていた。ユダヤ人という「他者」に対する反感を共有し育んでいるうちに、紳士階級、職人、農民、産業労働者

たちの間にどのくらいの間接感が生まれてきたかという問題は、国家の歴史の一部ではあるが、ナショナリストにとってはあまり思い出しにくいことではない。

以上のような理由から、ユダヤ人と資本主義について研究しているのは弁証家、イデオロギー信奉者、反ユダヤ主義者だけになりがちだった。本書ではそれとは対照的に、社会科学者に無視されがちだった近代史のパターンを解明しようと試みている。

一七世紀にはつきりとした近代資本主義が登場するずっと前から、ユダヤ人は商売と金貸しに関わってきた。この関係がもたらした影響はいつまでも続くものだった。またこれは、近代資本主義の条件下で、ユダヤ人が比喩物にならないほどの成功をおさめた一因でもある。そのうえ、近代の非ユダヤ系知識人の資本主義に対する考え方は、ユダヤ人に対する考え方と関係していることが多かった。こうした評価が、今度はユダヤ人自身やその経済的役割り、社会的地位に関する考え方に影響した。モーゼス・メンデルスゾーンのようなユダヤ系知識人はこの関係をよく理解していて、ユダヤ人の公民的平等に関する問題と、ユダヤ人が従事している経済活動におけるプラスの機能に関する議論とを結びつけた。

ヨーゼフ・シュンペーターは、資本主義の活力の本質的な部分を説明するために「創造的破壊」という言葉を使っていた。これは古い形の生産方法や消費形態や生活様式が、資

本主義的革新によって作りだされた新しい形のものに取って代わられるという意味である。ユダヤ人は経済的にあまりに成功したために、この「創造的破壊」によってあちこちで生み出された不満や敵意を一身に集めることになった。資本主義の発展が近代の民族国家の誕生と密接に関係しあっていて、旧世界の多くが、ユダヤ人を国民共同体の外側に位置づける民族的ナシヨナリズムの形をとっていたという事実も、こうした敵意の原因となった。そのためユダヤ人に対する新たな、より近代的な形の敵意は、宗教的な違いというよりむしろユダヤ人の経済的成功に対する反感に根ざしたものとなっている。その結果、数は少なくとも突出したユダヤ人の少数派が、反資本主義の最も過激な形である共産主義を受け入れることになった。その選択は自身に破滅的な結果をもたらした。こうして最終的には多くのユダヤ人が、資本主義とナシヨナリズムの時代には、自分たちの民族国家が必要だと結論するようになった。

これが本書の四つの章を結びつけているテーマである。各章では、一般的な歴史とユダヤ人の歴史の境界や、知的、経済的、政治的歴史の境界を行き来する。各章の目的は、資本主義、共産主義、ナシヨナリズム、ファシズムの発達という近代ヨーロッパ史の大きなテーマと、ユダヤ人の経験の関連性を明らかにすることである。また、近代ヨーロッパに注目する

一方で、アメリカやイスラエルといったヨーロッパ以外の国々に対する、これらの現象の影響も取りあげる。

社会学者はユダヤ人と資本主義の関係を説明するときに、「商業的なディアスポラ・マイノリティ」としてのユダヤ人の概念を頻繁に使用する。この概念は、ユダヤ人と近代資本主義の関係を理解するには不可欠だが、それだけでは不十分である。^(注2)ユダヤ人は、まだ主権国家を持っていた時代にイスラエルの地から離^{ディアスポラ}散し始め、その後はローマ帝国や、さらにはキリスト教ヨーロッパやイスラエルの地で、ディアスポラ・マイノリティとして暮らしてきた。ユダヤ人の歴史の大半において、彼らは決して商業民族ではなかったが、中世のキリスト教世界では商業民族となった。彼らはアルメニア人やギリシヤ人、華僑のような、他の商業的なディアスポラ・マイノリティと同じように、商売に役立つ技術や文化的性質だけでなく、地域を超えた商業的ネットワークも発達させた。こうしたマイノリティには、特殊な経済能力と政治的に無力であることが組み合わさっているという特徴がある。

とはいえ、商業的なディアスポラ・マイノリティという分類だけでは、キリスト教ヨーロッパにおけるユダヤ人の重要性を理解するには不十分である。なぜなら、ユダヤ人はキリ

2 「訳注」「ディアスポラ・マイノリティ」は離散した少数民族というような意味。

スト教神学において特殊な立場にあったため、卑しい経済活動、特に利息を取って金を貸すことが許されていたからだ。彼らはキリストが出現した共同体として、寛大に扱われていた。キリスト教から見れば、旧約聖書の物語は、救済という考え方においてイエスが果たす役割の根柢となるものである。ユダヤ人は旧約聖書の民族として生き残り、キリスト教の物語の歴史的な古さを示す具体的な証拠になるとともに、最終的にはキリストの再来を証言することになっていった。しかし、ユダヤ人がイエスを神として認めなかったことは、彼らの愚かさや霊的な不完全さを示す証拠だった。アウグスティヌスと後のキリスト教神学者によると、ユダヤ人は他の信仰をもつ人々とは違い、キリスト教ヨーロッパにおいて寛容に扱われることになっていった。しかし、ユダヤ人や善きキリスト教徒たちが、ユダヤ人が霊的に弱い存在であることを忘れないようにするために、彼らの地位を非常に低いものにしておく必要があった。キリスト教にとってユダヤ人は他者だったが、ユダヤ人がキリスト教徒の中で暮らしているという意味でも、ユダヤ人の聖書（キリスト教徒はユダヤ人がその内容を誤解していると考えている）がキリスト教の歴史において中心的な物語の一つになっているという意味でも、ユダヤ人は内なる他者であった。

このようにユダヤ人は、他の商業的なマイノリティと違って文化的に重要であり、彼ら

に対する意見が衝突しやすいという特徴を持っていた。寛容に扱われつつ軽蔑されている部外者^{アウトサイダー}としての宗教的立場と、商業的なマイノリティとしての経済的役割が重なった状態は、非常に悲惨なものだった。ユダヤ人と利子を取って金を貸すことの結びつきは、救済された者の共同体の外に属しているからこそ可能だったのである。さらに、お金と神学的に軽蔑されているマイノリティとのつながりは、お金やお金を儲けるといふことの周囲に疑念のオーラを投げかけている。

ヨーロッパにユダヤ人がいなかったとしても、資本主義の広がりには反資本主義運動とナシヨナリズム運動をもたらしたことだろう。しかし、近代の資本主義社会では、成功できるかどうかは商才や学校教育にますます左右されるようになっていたし、ユダヤ人は近代以前から商業の経験があり、読み書きの能^{リテラシー}力や学校教育を重視する習慣もあったため、他とは比べ物にならないほどの成功をおさめる傾向があった。反資本主義者は、キリスト教の反ユダヤ主義に関する概念的分類と、お金でお金を儲けることや高利貸しに対する伝統的な非難を借用して、資本主義を非難しようとした。ヨーロッパの国々は、近代化に向けて読み書きのできる資本主義者の社会を作ろうとしたが、今度もまたユダヤ人を部外者だと考える、民族的ナシヨナリズムを生み出すことになった。

国家における民族的に規定された共同体から排除されることが多くなってくると、ユダヤ人は三つの方法で対応した。

ユダヤ人はまず、ナシヨナリズムの定義が寛大で、それが宗教や民族的な基準には基づいていない国々に移住した。つまり、一八八〇年に世界のユダヤ人の大半が暮らしていたロシアから、西のオーストリア・ハンガリー帝国やドイツ、フランス、イギリス、とりわけアメリカへと移住した。といってもアメリカは一九二四年から、それ以上の集団移住を認めなくなつた。自由主義国のユダヤ人は、自由主義や有力な文化への統合政策を受け入れる傾向があり、ハプスブルク帝国末期のような初期の自由主義国であつても、それは変わらなかつた。一部のユダヤ人が完全な同化と融合を望む一方で、たいていのユダヤ人は完全に同化はしなくても、受け入れてくれた社会の文化に溶け込もうとした。^(注3)しかし自由な形のナシヨナリズムと狭量で民族的なナシヨナリズムとの境界は変わりやすく、ユダヤ人は寛大で快適な政治文化が、狭量で敵対的なものに変化する場合があることに、何度も気づかされた。これはハンガリー、オーストリア、ドイツ、フランス、そしてもつと弱い形ではあるがアメリカでも起きた。

ユダヤ人の二つめの対策は、血統に基づく不当な差別をなくすと約束していた、社会主義

運動を受け入れることだった。ほとんどの社会主義者は、反ユダヤ主義が持続しているのは資本主義そのものが原因だと考えていたため、資本主義を排除すれば反ユダヤ主義も排除できると思っていた。これらの運動の中で、最も過激で厳しいものが共産主義である。

何らかの形でユダヤ人らしさを保ち続けようと未だに努力していた人々は、三つめの対策としてシオニズム（注3）を選んだ。この運動で一番説得力があったのは、万人救済論者のイデオロギーは、実現不可能な妄想であることが証明されるはずだと主張する分析だった。その分析では、キリスト教社会やキリスト教以後の社会とユダヤ人の違いは根が深く、ナシヨナリズムがますます深まっていく時代では、反資本主義と反社会主義のどちらにおいても、その違いがますます明確になっていくと主張していた。初期のシオニズムの理論家モシエ・レイブ・リリエンブルムは、一八八三年にそう警告している。（注4）リリエンブルムは、コスモポリタンや民族的ナシヨナリスト、資本主義者、社会主義者、自由思想家、保守的なキリスト教徒などは、誰もがユダヤ人を嫌悪する理由をもっていると主張した。それぞれのイデオロギー集団は、反対側の陣営にユダヤ人がいることを発見すると、たいてい社会の敵や国家の敵と

3 「訳注」イスラエルの地へのユダヤ人の帰還運動のこと（一八九〇年にこの言葉ができた。この運動は紀元前七〇年頃から始まり、第二次大戦後、国連の決議を経て一九四七年にイスラエル国家が誕生した。

ユダヤ人を同一視するようになった。^(注5) シオニストの分析では、資本主義者であっても社会主義者であっても、文化融合論者であってもナシヨナリストであっても、宗教的であっても世俗的であっても、ユダヤ人は「他者」と定義し続けられることになるという。唯一の解決方法は、ユダヤ人が自分たちの国家をもつことだった。

本書を構成している四つの章では、これらの絡み合った事象についてさまざまな視点から検討する。第一章の「高利貸しの長い影」では、ユダヤ人とお金の伝統的なつながりが、資本主義とユダヤ人に関する近代ヨーロッパの知識人たちの思想にどのように影響し続けていたかを考察する。後で述べるように、資本主義に対して肯定的な場合は、ユダヤ人に対してもかなり同情的なことが多かったが、商業への反感とユダヤ人への反感はたいして密接に関係し合っていた。また第一章では非ユダヤ系の主な知識人が、資本主義とユダヤ人についてのどのように考えていたのかを検討し、第二章の「資本主義に対するユダヤ人の反応」では、このことを別の面から考察する。その出発点となるのが、自由主義の経済学者であるミルトン・フリードマンによる講義だ。彼は資本主義がユダヤ人にとって役立つべきだという事実にも関わらず、非常に多くのユダヤ人が資本主義に反感を抱いていることに気づいて戸惑っ

ていた。この章では、資本主義社会において、ユダヤ人が他とは比べ物にならないほどの経済的成功をおさめているという現実についてとりあげる。また一流のユダヤ人思想家が資本主義とユダヤ人の相互関係を認識していたこと、その関係に関する彼らの解釈や、彼らがそれを頻繁に肯定していたことについても触れる。しかし、他のユダヤ系の人たちは、資本主義や近代の反ユダヤ主義に対して、最も極端な形の反資本主義、すなわち共産主義を受け入れるという反応を示した。ほとんどの歴史学者は、共産主義を信奉したことによる破滅的な結末を正しく評価できていない。そこで第三章の「過激な反資本主義・共産主義者としてのユダヤ人」では、これをテーマとした。最終章の「二〇世紀のヨーロッパにおけるナシヨナリズムの経済的意味とユダヤ人の運命」では、アーネスト・ゲルナーが、近代のユダヤ民族の歴史を説明するために行なった研究の意義について検討する。資本主義とナシヨナリズムとユダヤ人の運命の関係は、二〇世紀初頭に社会主義的なシオニストが調査しているが、中でもドヴ・ベル・ポロコフには注目すべきである。ゲルナーは二〇世紀末にこれらのテーマを復活させたが、私は彼の分析は、この関係に関する最も明快な唯一の分析だと思っている。彼は資本主義の経済的發展とナシヨナリズムの出現との関係を追跡し、ユダヤ人の経済的成功をもたらしたのは、商業的なディアスポラ・マイノリティというユダヤ人の伝統的立場そ

のものであると説明した。また、そのためにヨーロッパのユダヤ人が、民族的ナシヨナリズムの時代にとりわけ危険な立場に置かれることになった理由も明らかにした。

各章は資本主義、共産主義、ナシヨナリズム、シオニズム、ナチズムの歴史に興味を持つ人たちにとって、これらのテーマの相互関係が明らかになるように書かれている。ここ二〇年にわたってエッセイとして執筆してきたものだが、今回の出版に合わせてどれも修正を加えた。エッセイという形の長所は、関連データをすべて取りあげていると主張しなくても、幅広いテーマについて検討できることである。各章では、あるレベルでの一般化を行なっているが、歴史学者が不愉快に感じることもあるとしたら、それはこれらの章で、細部だけでなく全体を見渡せるように、いくつかのパターンを示そうとしているからである。

資本主義とユダヤ人というテーマは、さまざまな側面から理解できるし、またそうすべきである。各章では、こうした一つか二つの側面に注目している。とはいえ、それぞれの要素をさまざまな方法で組み立てて解釈することができるし、どのような解釈に最も同意できるかは、読者の方々に自由に考えていただきたいと思っている。